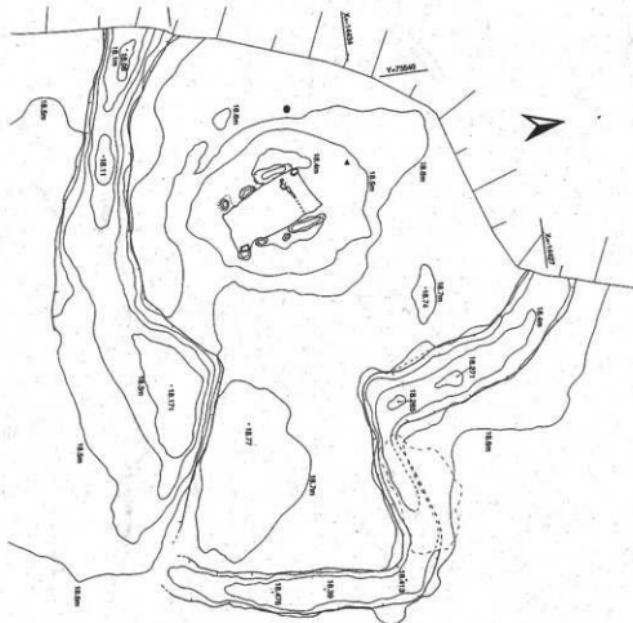


雲仙市文化財調査報告書(概報) 第1集

りゅう おう くら ち がわ  
龍 王 遺 跡(倉地川古墳)

—国見中部地区県営圃場整備に伴う発掘調査概報—



2006

長崎県雲仙市教育委員会



## 発行にあたって

このたび平成16年度に実施しました雲仙市国見中部地区圃場整備事業に伴う龍王遺跡の緊急発掘調査の報告書（概報）を発刊することになりました。

龍王遺跡は雲仙市の北部に位置し、東側には土黒川、西側には倉地川が流れるなだらかな扇状地の水田地帯に所在します。古代条里制の痕跡が残る田園風景の中に遺跡が広がっており、当地より南側を望めば雲仙普賢岳がそびえ、頂上付近には平成新山と名付けられた溶岩ドームが噴火の生々しさを今に伝えています。また、北側に目を移せば、眼下には有明海が広がり、佐賀県・福岡県・熊本県までも一望することができます。

龍王遺跡からは、旧石器時代から中世までの幅広い時代の遺物・遺構が数多く発見されております。今回報告いたしますのは、調査において新規に発見された前方後円墳であります。当初遺跡内には古墳の所在はまったく想定しておりませんでした。龍王遺跡はその大部分が水田として利用されており、古墳と思しき痕跡はほとんどありません。発見された古墳は水田地帯の中に浮島のように残された「畠地」にありました。詳しく調べてみると、「その畠からは開墾時に巨大な岩が出て、庭石に運んでいった。」とのことでありました。おそらく調査では検出されなかつた「石室」の一部であります。墳丘や石室はすでに消滅してしまっておりましたが、石室の床面、古墳周りの溝などははっきりと確認でき、空中写真などからもはっきりと鍵穴状の「前方後円墳」であると確認できます。石室内部からは鉄製品や勾玉などの副葬品が、古墳の周囲からは大量の須恵器が、また、少量ですが人骨も発見されています。発見された須恵器から古墳の年代を推測すると、島原半島では「最後に造られた前方後円墳」と考えられ、古墳時代の島原半島の歴史解明に大きな進展をもたらすものです。

「雲仙市」は平成17年10月11日、島原半島の北西部7町（国見町・瑞穂町・吾妻町・愛野町・千々石町・小浜町・南串山町）による合併で誕生しました。雲仙岳を主峰とする山々と緑豊かな農業地帯、また、豊饒の海である有明海・橘湾とともに新たな歴史を築いていきます。今報告が雲仙市として最初のものであり、旧町時代と同じくこれまでどおり祖先の貴重な文化遺産を保護し、これを後世に伝えることは、私たちに課せられた重要な責務であります。合併により大きく拡大した雲仙市のなかで、各地域の歴史の重要性・必要性はますます高まるものと考えられます。今後も貴重な文化財を保護し、地域の発展に寄与するべく事業に取り組んでいきたいと考えております。

最後になりましたが、今回の調査に当たり、地権者の皆様、工事関係者の皆様、大学・博物館関係の諸先生方ならびに長崎県学芸文化課のご指導に衷心より感謝申し上げ発刊のことばといたします。

平成18年3月31日

長崎県雲仙市教育委員会

教育長 鈴山勝利

## 例　　言

1. 本報告は2004年（平成16年度）に実施した国見中部地区県営圃場整備事業に伴う長崎県南高来郡国見町（現長崎県雲仙市国見町）に所在する龍王遺跡の緊急発掘調査の報告（概報）である。

2. 調査は国見町教育委員会（現雲仙市教育委員会）が担当した。

調査は2004年3月～4月に範囲確認調査を実施し、その結果をもとに下記の期間で発掘調査を実施した。

2004年8月4日～2005年3月21日（平成16年度） 1区～31区

2004年8月30日～2004年10月31日（平成16年度） 倉地川地区

3. 調査当時の体制は次のとおりである。

調査主体 国見町教育委員会 教育長 原 宮之

同 教育次長 吉田 正昭

同 教育社会係長 柴崎 孝光

調査担当 同 社会教育係 辻田 直人

同 文化財調査員 竹中 哲朗

4. 現地での遺構・遺物の実測は東文子・林繁美・寺中典子・深水聰子・福田次郎・竹田将人・竹中・辻田が行い、遺物の復元、実測、製図は竹中・織田健吾・早稲田一美・柳原亜矢子が行った。写真は現地写真は竹中・辻田が行い、遺物写真は竹中・織田が行った。

5. 遺構実測の一部は（株）九州文化財サポートシステムに委託した。

6. 空中写真撮影業務は（株）九州文化財研究所に委託した。

7. 本遺跡の遺物及び写真・図面等は雲仙市国見神代小路歴史文化公園歴史民俗資料館で保管している。

8. 本書で用いた方位はすべて真北であり、国土座標は世界測地系による。

9. 現地調査および本書の発刊にあたって多くの方々からご助言ご協力いただき、記して謝意を表します。

小田富士雄（福岡大学）・宮崎貴夫・川道寛・古門雅高・本田秀樹・榎木アキ子（長崎県学芸文化課）、渡邊康行（埋蔵文化財サポートシステム）、荒木伸也（長崎県南島原市教育委員会）、宇土靖之（長崎県島原市教育委員会）、長崎県島原振興局、長崎県教育委員会、国見町郷土史研究会、織田建設（順不同）

10. 本書の執筆は竹中哲朗・織田健吾が分担し、各章及び各節文末に執筆者を記した。

11. 本書の編集は竹中による。

# 目 次

卷頭図版

目次

本文

図版

第1章 龍王遺跡周辺の地理的・歴史的環境 .....	1 p
第1節 龍王遺跡の地理的環境（織田）	第2節 龍王遺跡周辺の歴史的環境（織田）
第2章 調査にいたる経緯 .....	5 p
第1節 前方後円墳発見の経緯（竹中）	第2節 記者発表・現地説明会（竹中）
第3章 調査の概要 .....	7 p
第1節 試掘調査の成果（竹中）	第2節 表面採集資料の紹介（織田）
第3節 検出された造構の概略（竹中）	
第4章 方形周溝墓と前方後円墳 .....	15 p
第1節 調査区の設定と目的（竹中）	第2節 方形周溝墓（竹中）
第3節 前方後円墳（竹中・織田）	
第5章 土坑・掘立柱建物 .....	52 p
第1節 土坑墓と集石造構（竹中）	第2節 掘立柱建物（竹中）
第6章 考 察 .....	57 p
第1節 倉地川古墳の概要（竹中）	
第2節 雲仙市国見町内出土同心円文當て具痕（竹中）	
第3節 龍王遺跡31区住居跡出土土師器の紹介（竹中）	
第4節 龍王遺跡発見の古墳時代前期豪族居館（竹中）	
第5節 龍王遺跡22区住居跡出土土師器の紹介（竹中）	

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図(1/10,000)	
第2図 龍王遺跡周辺遺跡図(1/2,000) .....	3
第3図 調査区配置図(1/2,000) .....	4
第4図 龍王遺跡全体図(1/4,000) .....	7
第5図 真正寺条里跡第143号試掘坑 出土土器(1/1) .....	8
第6図 第101号試掘坑出土土器(1/3).....	8
第7図 表面採集資料①(1/3) .....	8
第8図 表面採集資料②(1/3) .....	9
第9図 表面採集資料③(1/3) .....	10
第10図 表面採集資料④(1/3) .....	11
第11図 表面採集資料⑤(1/3) .....	12
第12図 倉地川地区検出遺構平面図(1/200) .....	14
第13図 方形周溝墓の調査区(1/200) .....	15
第14図 前方後円墳の調査区(1/200) .....	15
第15図 方形周溝墓実測図(1/80・1/40) .....	16
第16図 方形周溝墓出土土器(1/3) .....	18
第17図 倉地川古墳測量図(1/100) .....	21~22
第18図 埋葬施設平面図(1/30).....	23
第19図 石室石障転用凹石(1/4) .....	23
第20図 副葬品(装身具類2/3).....	24
第21図 副葬品(鉄製品1/2).....	24
第22図 南側くびれ部検出状況(1/50) .....	25~26
第23図 南側くびれ部出土土器接合関係· 土師器(1/50).....	27~28
第24図 南側くびれ部出土土器接合関係· 須恵器(1/50).....	29~30
第25図 南側くびれ部出土土器接合関係· 須恵器(1/50).....	31~32
第26図 北側くびれ部検出状況(1/50).....	33
第27図 周隣セクション図·土器片分布図 (1/30).....	35
第28図 前方後円墳出土土器(坏·皿·1/3) .....	36
第29図 前方後円墳出土土器(高坏·壺·1/3) .....	37
第30図 前方後円墳出土須恵器(坏·1/3).....	40
第31図 前方後円墳出土須恵器(高坏·1/3).....	40
第32図 前方後円墳出土須恵器(壺·1/3).....	42
第33図 前方後円墳出土須恵器(提瓶·壺·1/3) .....	42
第34図 前方後円墳出土須恵器 (小壺·平瓶·1/3) .....	43
第35図 前方後円墳出土須恵器(壺①·1/3).....	44
第36図 前方後円墳出土須恵器(壺②·1/4) .....	45
第37図 前方後円墳出土須恵器(壺④·1/3).....	46
第38図 前方後円墳出土須恵器(壺③·1/4) .....	47~48
第39図 前方後円墳出土須恵器(壺⑤·1/3) .....	49
第40図 前方後円墳出土須恵器(壺⑥·1/3) .....	50
第41図 前方後円墳出土須恵器(壺⑦·1/3) .....	50
第42図 前方後円墳出土須恵器(壺⑧·1/3) .....	51
第43図 倉地川地区土坑墓出土土器(1/3) .....	52
第44図 倉地川地区土坑墓 SK01(1/20) .....	52
第45図 倉地川地区集石遺構 SK02平面· セクション図(1/20) .....	53
第46図 倉地川地区 SB01平面· エレベーション図(1/50) .....	54
第47図 倉地川地区 SB01柱 E 4 出土土器(1/3) .....	54
第48図 倉地川地区 SB02平面· エレベーション図(1/50) .....	55
第49図 倉地川地区 SB03平面· エレベーション図(1/50) .....	56
第50図 倉地川地区 SB03柱 N 出土土器(1/3) .....	56
第51図 埋葬施設(玄室)規模 .....	57
第52図 国見町内出土同心円文當て具痕 (石原·矢房遺跡1/1) .....	58
第53図 国見町内出土同心円文當て具痕 (十箇遺跡1/1) .....	59

第54図 国見町内出土同心円文当て具痕 (倉地川地区①1/1) .....	60
第55図 国見町内出土同心円文当て具痕 (倉地川地区②1/1) .....	61
第56図 31区 SB01出土土師器(1/3).....	62
第57図 龍王遺跡発見の囲郭施設と関連する建 物群(1/400) .....	64
第58図 囲郭施設内部 SB 4 出土土師器(1/3) .....	65
第59図 龍王遺跡22区 SB 5 住居跡出土土器 (1/3) .....	67

## 表 目 次

第1表 龍王遺跡周辺遺跡名.....	3
第2表 表面採集資料①②観察表.....	9
第3表 表面採集資料③観察表.....	10
第4表 表面採集資料④観察表.....	11
第5表 検出遺構一覧表.....	14
第6表 方形周溝墓出土土器観察表.....	17
第7表 周隙地区別土器分布表.....	34
第8表 前方後円墳出土土師器(壺・皿)観察表 .....	36
第9表 前方後円墳出土土器(高壺・壺)観察 表.....	38
第10表 前方後円墳出土須恵器(壺)観察表..	39
第11表 前方後円墳出土須恵器(高壺)観察表 .....	40
第12表 前方後円墳出土須恵器(壺・提瓶・壺) 観察表.....	41
第13表 前方後円墳出土須恵器(小壺・平瓶) 観察表.....	43
第14表 前方後円墳出土須恵器(壺)観察表..	46
第15表 国見町内出土同心円文当て具痕.....	58
第16表 31区 SB01出土土器観察表 .....	63
第17表 龍王遺跡22区 SB 5 出土土器観察表 .....	68

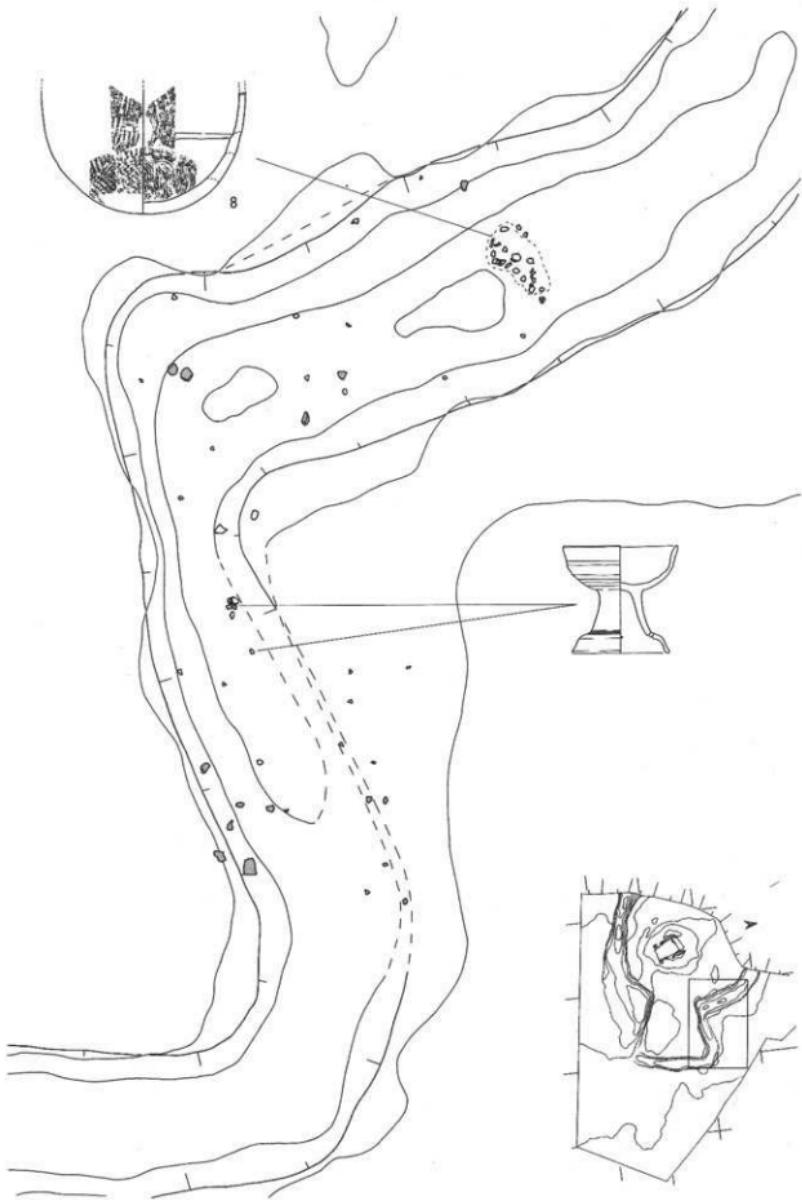
## 図版目次

- 卷頭図版① 龍王遺跡倉地川地区上空より雲仙普賢岳を望む（2004年10月）  
卷頭図版② 前方後円墳上空写真（龍王遺跡倉地川地区）  
　　横穴式石室検出状況（写真右は東、上は開口部側）  
卷頭図版③ 埋葬施設床面の鉄製品出土状況（写真下が西）  
　　周辺での土器の集中（後円部南側）  
卷頭図版④ 方形周溝墓検出状況（龍王遺跡倉地川地区）  
　　方形周郭施設の土器検出状況・断面・上空写真
- 図版 1 遺跡上空写真  
図版 2 倉地川地区検出状況（上が西）  
　　前方後円墳上空写真（上が西）  
　　南側周辺遺物検出状況（上が西）  
　　方形周溝墓上空写真（上が西）  
　　方形周溝墓検出状況（南より）  
　　方形周溝墓周溝断面（西より）  
図版 3 方形周溝墓及び掘立柱建物出土土器  
　　埋葬施設出土の石障片接合品  
　　（凹石・19図 P 23）  
　　南側周辺出土状況（南より）  
　　南側周辺出土状況（東より）  
　　南側周辺断面（西より）  
　　埋葬施設検出状況（上が東）  
　　周辺と埋葬施設の位置関係（南より）  
　　南側くびれ部土器出土状況（西より）  
図版 4 北側くびれ部土器出土状況（東より）  
　　前方後円墳検出作業（南より）  
　　古墳見学会の様子①  
　　古墳見学会の様子②  
　　土坑墓検出状況（北より）  
　　土坑墓半裁状況（北より）  
　　土坑墓断面（西より）  
　　土坑墓出土土器（43図 P 52）  
図版 5 表面採集資料（弥生土器片・土師器片）  
　　表面採集資料（須恵器片・9図 P 10）  
　　表面採集資料（須恵器甕片・10図 P 11）  
　　表面採集資料（陶磁器片・11図 P 12）  
　　周辺出土土師器坏類
- 図版 6 周辺出土土師器坏（28図-4 P 36）  
　　周辺出土土師器高坏（29図-9 P 37）  
　　周辺出土土師器高坏（29図-10 P 37）  
　　周辺出土土師器高坏（29図-11 P 37）  
　　周辺出土土師器高坏（29図-12 P 37）  
　　周辺出土土師器高坏（29図-18 P 37）  
　　周辺出土土師器脚付壺（29図-22 P 37）  
　　周辺出土土師器高坏  
　　（29図-13・14 P 37）  
　　周辺出土土師器高坏  
　　（29図-16・17・19 P 37）  
　　周辺出土土師器壺（29図-20・21 P 37）  
　　周辺出土土師器高坏（29図-18 P 37）脚  
　　内部  
　　周辺出土須恵器坏（30図-1 P 40）  
　　周辺出土須恵器（30図-2 P 40）  
　　周辺出土須恵器坏類（30図 P 40）  
　　周辺出土須恵器坏類（30図-31図 P 40）  
　　周辺出土須恵器高坏（31図-1 P 40）  
　　周辺出土須恵器高坏（31図-2 P 40）  
　　周辺出土須恵器高坏脚部片・甕  
　　（31図-4・7, 32図-4 P 40・42）  
　　周辺出土須恵器甕（32図-1 P 42）  
　　周辺出土須恵器甕（32図-2 P 42）  
　　周辺出土須恵器甕（32図-3 P 42）  
　　周辺出土須恵器甕（32図-5 P 42）  
　　周辺出土須恵器甕（32図-6 P 42）  
　　周辺出土須恵器長頸壺（33図-2 P 42）  
　　周辺出土須恵器小甕（34図-1 P 43）

- |                                    |                                |
|------------------------------------|--------------------------------|
| 周陞出土須恵器提瓶(33図-1 P 42)              | 図版10 周陞出土須恵器壺(37図④ P 46)外面     |
| 周陞出土須恵器平瓶(34図-2 P 43)              | 周陞出土須恵器壺(37図④ P 46)内面          |
| 周陞出土須恵器平瓶(34図-3 P 43)              | 周陞出土須恵器壺(39図⑤ P 49)表面          |
| 周陞出土須恵器俵型壺<br>(32図-7 P 42)         | 周陞出土須恵器壺(39図⑤ P 49)側面          |
| 周陞出土須恵器俵型壺の内部①<br>(32図-7 P 42)     | 周陞出土須恵器壺(40図⑥ P 50)外面          |
| 周陞出土須恵器俵型壺の内部②<br>(32図-7 P 42)     | 周陞出土須恵器壺(40図⑥ P 50)内面          |
| 周陞出土須恵器俵型壺の上面観<br>(32図-7 P 42)     | 周陞出土須恵器壺(42図⑧ P 51)外面          |
|                                    | 底部                             |
|                                    | 周陞出土須恵器俵型壺の上面観<br>(32図-7 P 42) |
|                                    | 周陞出土須恵器俵型壺の上面観<br>(32図-7 P 42) |
| 図版 9 周陞出土須恵器壺(35図① P 44)           | 周陞出土須恵器壺(42図⑧ P 51)内面          |
| 周陞出土須恵器壺<br>(39図⑤ P 49, 35図① P 44) | 底部                             |
| 周陞出土須恵器壺(36図② P 45)表面              | 図版11 周陞出土須恵器壺(41図⑦ P 50)表面     |
| 周陞出土須恵器壺(36図② P 45)内面              | 周陞出土須恵器壺(41図⑦ P 50)表面          |
| 周陞出土須恵器壺<br>(38図③ P 47~48)上半       | 周陞出土須恵器壺(41図⑦ P 50)内面          |
| 周陞出土須恵器壺<br>(38図③ P 47~48)下半       | 31区住居跡出土土師器壺<br>(56図-1 P 62)   |
|                                    | 31区住居跡出土土師器(56図 P 62)          |



第1図 遺跡位置図(1/10,000)



第26図 北側くびれ部検出状況(1/50)

下約1.0mm。重量は約2g。勾玉・管玉とも雲仙市国見町内での類例は県指定史跡高下古墳（鬼の岩屋）出土品にみられる。

第21図は鉄製品の実測図である。1が鉄製武器の鉢、2は鉄鎌、3・4は刀子である。1と3・4は石室床面の副葬された位置（第18図）で出土している。1と3は完全な形での出土であるが、4は切先が失われていた。2と5は石室内部での出土であるが、勾玉同様に礫敷きの乱れた部分（第18図）での出土であり、副葬された位置での検出ではない。

1は全長約21.2cmの長峰式で、柄は袋状となり、上半に卷物の痕跡が見られる。刃部長約12.1cm幅約2.6cm。袋部には目釘穴が1対みられる。刃部断面は菱形、袋部はほぼ正円となる。2は残存長10.4cmの長頭鎌片である。切先は失われている。3は全長約19.2cmの刀子で刃部長約14.6cmである。4も刀子で残存長12.7cm、柄に木質が残り、3とは闇の形態が異なる。5は形態が不明の鉄製品である。断面方形であるが、端部は丸く、断面は長方形となり、厚みがある。

（竹中）

### （3）周辺内の検出状況（第22～27図 第7表 図版3・4）

周辺内の土器出土状況は、平面的な分布等を実測（1/10）し、その把握に努めた。その結果、後円部南側からくびれ部にかけて集中し、その他では北側くびれ部、前方部の順で土器片の分布が多くみられた。また、土器の集中する部分には閉塞あるいは石室構築材として使用されたと思われる礎（第22～26図でアミ表示したもの）が多く見られた。それも実測図に表現している。第22図に黒丸印（●）で示すように、くびれ部では人骨の一部（歯冠）が検出され、その周りでは土器の集中が少ない状況であった。出土レベルは周辺底から5cm以上浮いた状態で検出されている。石室内の埋葬人骨が土器とともにくびれ部に引き出されたことが想定できる。それらの分布範囲を表であらわしたのが第7表である。調査地区A～Nは15p第14図に対応し、前方後円墳の部位も示しておいた。表の数字は個体数で括弧付き数字は破片数である。個体数は完全なまでに復元できないものも含め、実測・接合の段階で別個体と判別できたものをカウントしている。

土師器 坏16 高坏8 壺3 壺1 破片数376点

須恵器 坏身10 蓋9 高坏4 殿7 提瓶1 平瓶2 壺2 壺8 破片数738点

調査で出土した破片と調査区内から工事等により持ち出された表土中からの採集資料が接合した例がいくつかある。また、土師器壺は小型のもので、須恵器壺は長頸壺と短頸壺である。須恵器は殿や

第7表 周辺地区別土器分布表

器種	土師器				須恵器								
	坏	高坏	壺	壺	坏身	坏蓋	高台坏	高坏	壺	提瓶	平瓶	壺	壺
後円部南	A											(7)	1 (13)
	B	(1)	(6)			2 (10)	2 (5)		1 (1)	1 (11)	1 (8)	1 (6)	1 (12)
	C	8 (74)	3 (30)	2 (25)		7 (26)	4 (29)	1 (4)	1 (7)	6 (31)	1 (1)	1 (1)	3 (12)
くびれ部	D	8 (60)	5 (38)	1 (43)		1 (1)	3 (5)		1 (22)	(3)	1 (6)	(1)	2 (12)
	E		(19)					1 (1)					(1)
	F												
前方部前面	G												
	H												
	I			1 (5)									
前方部北	J												
	K							1 (7)					
	L											1 (19)	
くびれ部	M												
	N												

壺がほとんど完全な形で出土し、甕は多数出土し、50%以上に復元できたものが多い。

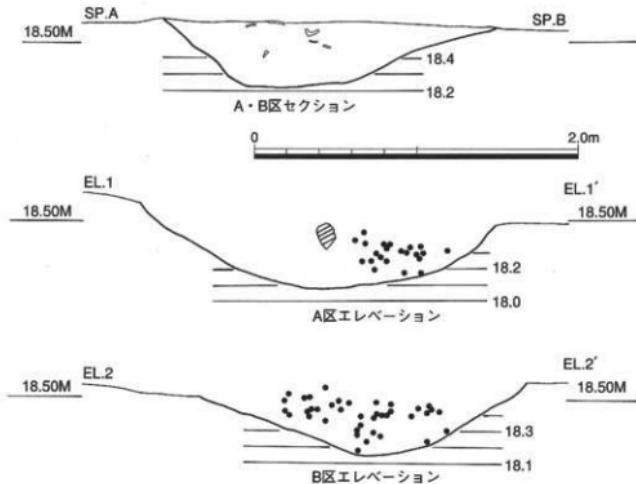
出土状態と接合関係は第22~26図に示しているが、小型の甕や壺などは比較的まとまりをもって出土しているかと思われる。甕などは破片のばらつきが目立つものもあり、比較的広い範囲に分布している。甕は土器の出土範囲内で検出しており、40cm角の大きなものから人頭大のもの、拳大のものまでさまざまである。石室と墳丘の崩壊はある程度早く、その後周隣が中位ほどまで埋まりきれるか否かの段階で、人為的な墳丘の削平が行われ、周隣が埋められた可能性が考えられる。

前方部の分布は、3cm大の小片が分布している。完全な形になるものが皆無で、接合できる資料もなく、縄文土器片と土師器片とが出土している。そのため墳丘上に供献されたものではなく、墳丘盛土内部にあったものなどが墳丘の崩壊に伴い、周隣中に落ち込んだものであろうと考えられる。

北側くびれ部の分布は第26図に示したように、須恵器甕底部片がくびれ部後円部側で、須恵器高杯がくびれ部前方部側で出土している。須恵器甕は底部のみで、胴部から上は失われ土圧により押しつぶされたような状態で出土している。後円部周隣内部にはこの甕と同一個体と思われるような破片資料は出土していない。須恵器高杯は周隣外寄りの位置で、墳丘側にやや傾いた状態で出土している。脚部の一部と口縁部の大部分とが欠けた状態で出土している。この個体と南側くびれ部で出土している一点（後円部出土の2cm四方の破片）とは接合関係にある。

後円部南側からくびれ部にかけての周隣（第22~25図）では多くの土器片が出土している。土器の大部分がこの部分で出土しており、石室開口部にあたるため副葬されたものや開口部近くの墳丘裾に供献されたものが大部分を占めるものと思われる。人頭大の大きさから拳大までの甕も土器の間に入り込むような状態で検出されている。また、人骨のほかに管玉が一点開口部前面の周隣内（第22図）で須恵器甕片の上約5cmで検出されている。

（竹中）

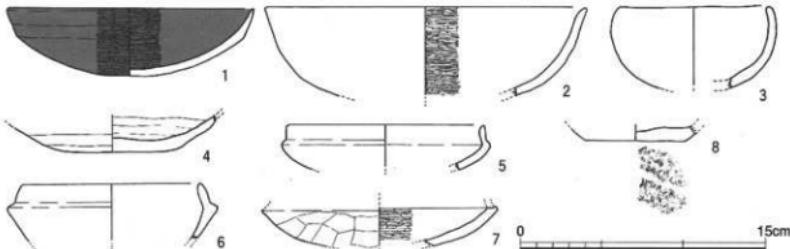


第27図 周隣セクション図・土器片分布図(1/30)

(4) 出土遺物 (第28~42図 第8~14表 図版5~11)

土師器 (第28・29図 第8・9表 図版5・6)

1は土師器環で、単純な口縁部をもつ比較的浅めの坏である。口縁部はわずかに内弯の傾向を持つ。外面の中位以上は面取りが行われ、その後ミガキ、中位以下はミガキを施す。内面は全体にミガキを施す。外面ともに丹が塗ってある。2は土師器环片で、口縁部が外反する形態で口唇端部が弱く外反する。外面は横ナデ、内面はミガキが施されている。3は土師器坏で、内弯する口縁、内外ともに指で丁寧になで平滑にする。焼成は甘い。4は土師器环片で30%程の接合資料である。ヘラ切りの平底。内面では中心部が隆起する。焼きは甘い。5~7は立ち上がりと受け部をもっており、須恵器の坏を模倣した模倣坏と呼ばれるものである。5は全体黒色処理が施されている。立ち上がりは1cmで直立している。坏の深さは2.4cm以上である。内外面ともに横ナデが加えられている。6は30%ほどの接合資料である。立ち上がりは1.2cmでやや内弯している。坏の深さは3.1cm以上である。内外面ともに横ナデが加えられている。焼成は甘い。7は坏の深さは2.1cm以上である。外面は不定方向のヘラ削り、ミガキにより調整され、内面はミガキにより調整されている。全体黒色処理が施されている。8は土師器皿で、底径(復元径)6.0cmである。内外面ともにナデが施される。底部は糸切り後ナデ仕上げが施してある。9は土師器高杯で、比較的小型の高坏である。坏部は水平に広がり、その後立ち上がり口縁部は外反する。脚部は基部から緩やかに広がり、 $1/4$ の高さより裾が開く。坏部外面はミガキ、横ナデ、坏部内面はヘラ削りにより調整されている。器画はなめらかである。10は土師器高杯で60%ほどの接合資料である。比較的小型の高坏である。坏部は水平に広がり、その後立ち上がり口縁部は外反する。脚部は基部から緩やかに広がり、 $1/4$ の高さより裾が開く。坏部は内外面ともにミガキが施されている。坏部口唇部は横ナデにより調整されている。脚部は外面ミガキ、内面ヘ

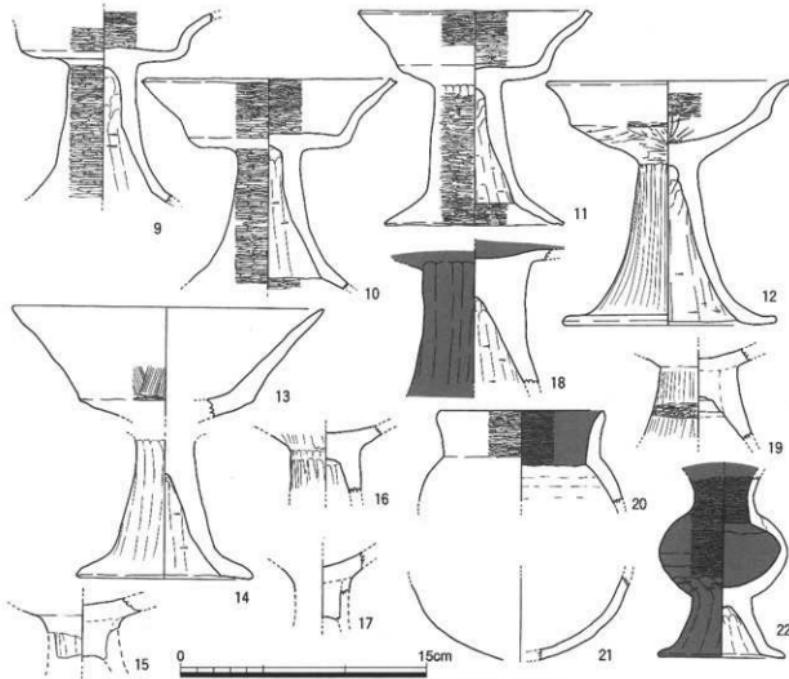


第28図 前方後円墳出土土師器(环・皿・1/3)

第8表 前方後円墳出土土師器(环・皿)観察表

図番号	種別	法量(cm)(復元径)	技術的特徴	胎土/色調	備考
1	土師器环	口縁部直径(15.0) 高さ 4.2	外面 ミガキ、胸部面取りミガキ 内面 ミガキ	石英、角閃石を少量含む 赤褐色(Hue2.5YR4/6)	全体に丹が塗ってある 焼成良好
2	土師器环	口縁部直径(19.8) 残存高 5.4	外面 横ナデ 内面 ミガキ	石英、角閃石を含む 橙(Hue5YR6/8)	焼成良好
3	土師器坏	口縁部直径(9.0) 坏の深さ 5.0以上 残存高 5.0	外面 ナデ 内面 ナデ	石英、角閃石、 赤色鉱石を少し含む 浅黄橙(Hue10YR6/4)	
4	土師器坏	残存高 2.3	外面 ヘラ削り 内面 同転利用のナデ	長石、石英、角閃石を含む にぶい黄橙(Hue10YR7/4)	
5	土師器 模倣坏	口縁部直径(12.0) 残存高 2.7 坏の深さ 2.4以上	外面 横ナデ 内面 横ナデ	石英、角閃石を少量含む にぶい黄橙(Hue10YR7/6)	全体黒色処理が施されている
6	土師器 模倣坏	口縁部直径(11.0) 残存高 3.5	外面 横ナデ 内面 横ナデ	石英、角閃石を少量含む 橙(Hue7.5YR7/6)	
7	土師器 模倣坏	残存高 2.4 坏の深さ 2.1以上	外面 ヘラケツリ後上からミガキ 内面 ミガキ	石英を少量含む 黒(Hue10YR2/1)	全体黒色処理が施されている
8	土師器 皿片	残存高 1.0 底径 6.0	外面 ナデ 底部糸切り(ナデ仕上げ) 内面 ナデ	赤色鉱石、雲母 浅黄橙(Hue7.5YR8/4)	

ラ削りにより調整されて全体の $1/3$ が坏部で $2/3$ が脚部である。11は土師器高坏で、70%ほどの接合資料である。坏部は水平に広がり、その後立ち上がり口縁部は外反する。脚部は基部から緩やかに広がり、 $1/4$ の高さより裾が開く。坏部外面はミガキ、横ナデ、内面はミガキにより調整されている。脚部外面は面取り後ヘラミガキ、内面はヘラ削りにより調整される。裾は内外面ともにミガキが施されている。器面はなめらかである。12は土師器高坏で、90%ほどの接合資料である。全体の $1/3$ が坏部で $2/3$ が脚部である。口縁部直径と脚径では口縁部直径が2cmほど広い。坏部は水平に広がり、その後立ち上がり口縁部は外反する。脚部は基部より緩やかに広がり、 $1/3$ の高さより裾が開き脚部端の接地面が広い。坏部外面は横ナデ、ミガキ、ヘラ削り、内面は横ナデ、ミガキが施されている。脚部外面は面とりミガキ、内面はヘラ削りが施され、裾は横ナデが内外面ともに施されている。全体に黒色処理が施されている。13は土師器高坏坏部で、内弯する短い坏底部へ同じくわずかに内弯の傾向をもって長くのびた坏口縁部をもつ器形。坏底部と坏口縁部との接合部は、外面に段をなす。外面は横ナデ、刷毛目、ミガキが施され、内面は横ナデが施されている。14は土師器高坏脚部で、 $1/4$ の高さより裾が緩く開く。外面は上から下へ面取りが行われている。裾は横ナデが加えられている。15は土師器高杯脚部片で、坏底面もわずかに残る。脚径は4.5cmで、残存高は3.9cmである。外面は面取りが施されるが、かなりの部分は剥がれてしまっている。内面は指頭オサエが施される。16は土師器高杯脚部片で、坏底面も残る。外面は細いミガキに似た削りがほどこされている。内面は坏部はナデ（ミガキ仕上げ）、脚部は削りが施されている。17は土師器高杯脚部片で、脚径3.8cm、残存高は4.7cmである。内外面ともにナデが施されている。磨耗の激しい資料である。18は土師器高坏脚部で、外面は上から下へ面取りが行われている。内面はヘラ削りが行われている。全体に丹が塗ら



第29図 前方後円墳出土土師器(高坏・壺・1/3)

れていた痕跡がある。19は土師器高杯脚部片で、坏底面も残る。脚径4.8cmで残存高は5.7cmである。外面は綫方向の面とりのあと横方向のミガキ、内面は指頭オサエ、削りが施されている。20は土師器壺口縁部で45%ほどの接合資料である。直立する口縁部を呈する。内面には丹が塗られている。21は土師器壺胴部片で、底部は穿孔されている。形状は球形になると思われる。内外面ともにナデ調整である。内面には丹が塗られている。22は土師器脚付き壺で、75%ほどの接合資料である。壺部外面の中位以下は面取りが行われ、その後ミガキ、中位以上から頸部はミガキを施す。脚部も面取りが行われ、その後ミガキが施されている。全体に丹が塗られている。脚部内面には塗られていないが頸部内面には塗られている。

(織田)

第9表 前方後円墳出土土師器(高杯・壺)観察表

回	番号	種別	法量(cm)(復元径)	技術的特徴	胎石/色調	備考
9	土師器 高杯	残存高	11.6	坏部:上位ミガキ	角閃石, 石英が少々 明褐(Hue5.5YR5/6)	接合破片がD区と E区にまたがっている
		坏部深さ	2.2以上	外面下位横ナデ		
		脚部径	10.1	脚部:ミガキ		
		脚部径	4.1	内面 脚部:ミガキ		
10	土師器 高杯	脚部高	8.4以上	脚部:指頭オサエ, 削り	角閃石を少し 外面 橙(Hue5YR6/6) 内面 明褐(Hue7.5YR5/6)	脚部高 8.5cm
		口縁部直径	(15.6)	口唇部:横ナデ, 坏部:ミガキ		
		脚部径	3.9	外面 坏部:横ナデ		
		残存高	12.8	脚部:ミガキ		
		脚部径	10.0	内面 坏部:ミガキ, 頸部:ミガキ		
11	土師器 高杯	脚部深さ	3.4	脚部:指頭オサエ, 削り	角閃石, 石英が少々 橙(Hue5YR6/6)	接合破片がD区と E区にまたがっている  脚径 11.0cm
		口縁部直径	(14.4)	口唇部:横ナデ		
		脚部径	4.1	坏部:上位ミガキ, 下位横ナデ		
		残存高	13.1	脚部:面取りミガキ後ヘラミガキ		
		坏部径	9.4	裾部:ミガキ		
12	土師器 高杯	坏部深さ	3.5	内面 坏部:ミガキ, 脚部:指頭オサエ, 削り	角閃石, 石英が少々 橙(Hue5YR6/6)	全体(脚部内を除く) に黒色処理をする 焼成良好 脚径 13.1cm
		脚部高	8.5	裾部:ミガキ, 横ナデ		
		口縁部直径	15.0	坏部:上位横ナデ, ヘラ削り		
		脚部径	12.0	外面 脚部:面取りミガキ		
		坏部深さ	3.8	裾部:横ナデ		
13	土師器 高杯	脚部径	3.9	内面 脚部:ミガキ	角閃石, 赤色粒子, 白色粒子 橙(Hue5YR5/4) 橙(Hue5YR7/4)	刷毛目は2.2cm幅に 15本 接合破片がB区と C区にまたがっている
		脚部高	10.0	内面 裾部:横ナデ		
		残存高	14.9	脚部:指頭オサエ, 削り		
		口縁部直径	(19.0)	坏部:上位横ナデ, 外面 中位刷毛目, ミガキ		
		坏部深さ	5.6以上	下位ナデ		
14	土師器 高杯脚部	残存高	6.8	内面 横ナデ	赤色粒子, 角閃石, 石英 橙(Hue5YR6/6)	
		脚部径	10.6			
		脚部高	8.7			
		脚部径	8.7以上			
		脚部径	3.8			
15	土師器 高杯脚部片	脚部径	10.8	内面 脚部:面取りミガキ 脚部:削り, 指頭オサエ 裾部:横ナデ	赤色砂多い 橙(Hue5YR7/6)	
		残存高	3.8			
		脚部高	4.0			
		脚部径	4.2			
		脚部高	4.7			
16	土師器 脚部片	脚部径	3.8	外側 内面 脚部:削り	赤色粒子, 白色粒子, 角閃石 外側 橙(Hue5YR7/6) 内面 明赤褐(Hue5YR5/6)	磨耗の激しい資料
		脚部高	8.3			
		脚部径	7.5			
		脚部高	6.5			
		脚部径	4.8			
17	土師器 脚部片	脚部高	5.7	外側 内面 脚部:削り	赤色砂が多い, 石英 橙(Hue5YR7/6)	磨耗の激しい資料
		脚部径	8.3			
		脚部高	7.5			
		脚部径	6.5			
		脚部高	4.7			
18	土師器 高杯脚部	脚部径	3.8	外側 内面 脚部:削り	赤色砂多い, 石英 橙(Hue5YR7/6)	焼成良好
		脚部高	8.3			
		脚部径	7.5			
		脚部高	6.5			
		脚部径	4.8			
19	土師器 脚部片	脚部高	5.7	外側 内面 脚部:削り	赤砂, 雲母, 白色粒子 橙(Hue5YR7/6)	
		脚部高	5.7			
		脚部径	4.8			
		脚部高	5.7			
		脚部径	4.8			
20	土師器 壺口縁部	口縁部直径	(9.8)	外側 内面 脚部:削り	石英, 角閃石, 赤色粒子少々 明褐(Hue10YR7/6)	口縁部内面に丹塗り 焼成良好
		残存高	5.8			
		脚部高	5.8			
		脚部径	3.7			
		脚部高	7.4			
21	土師器 壺胴部	残存高	5.1	外側 内面 脚部:削り	石英, 角閃石, 赤色粒子少々 明褐(Hue10YR7/6)	全体に丹塗り 焼成良好
		脚部高	11.1			
		脚部径	7.8			
		脚部高	3.5			
		脚部径	3.7			
22	土師器 脚部片	壺残存高	7.4	内面 脚部:削り	壺頸部:ミガキ, 脚部:ナデ 脚部:削り	全体に丹塗り 接合破片がC区とD区にまたがっている
		壺脚部径	7.8			
		壺脚部径	4.1			
		壺脚部径	4.1			
		壺脚部径	4.1			

須恵器（第30～42図 第10～14表 図版7～11）

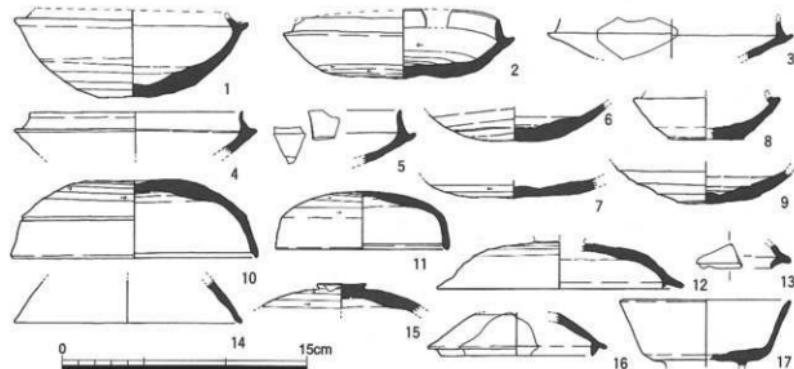
第30図は壺類の実測図である。いずれも完全な形になるまで接合できたものではなく、半分以下の破片資料がほとんどである。2のように半分以上に復元できたものでも、4や3などの破片資料でも、焼け歪みのある製品が目立つことは特徴的である。

壺身は丸底で口縁部にかえりをもつ形態のものがほとんどである。壺蓋は丸みの残る天井部に直立する口縁部をもつものと、かえりの付く形態に分類できる。8は底部か蓋の天井部かいずれかの破片資料である。15は扁平なつまみの付く蓋天井部片である。いずれも内部には形成による凹凸が残るナデ仕上げ、外面は天井部および底部を中心に回転利用のヘラ削り仕上げである。また、1と2を除いたほとんどが復元実測であるため説得力に欠けるが、大部分の直径は壺・蓋ともに14～15cmに収まる傾向にある。それらに当てはまらないものは16や17であり、最大部分の直径は10～11cmである。17はやや小ぶりの高台の付いた壺であり、器壁が非常に薄く仕上げられている点が特徴的である。

第31図は高壺の実測図である。1と2は半分以上の復元率であるが、それ以外は破片資料である。特に4・5・6は直径が復元できないほど的小片である。また、3は底の口縁部となる可能性もある。壺類と同様に焼け歪みが目立つ製品群である。1は上面観が正円とならず梢円形となり、口縁部は水平にはならない。1のように深みのある壺に短い脚部のついた形態は、当古墳ではこの資料のみとなる。脚部のつくりが比較的厚く端部が丸いことから、2とは形式的な差をもつものと思われる。2は焼け歪みの少ない製品であり、上面観は脚部裾・口縁部とともにほぼ正円を描いている。2は脚部裾外

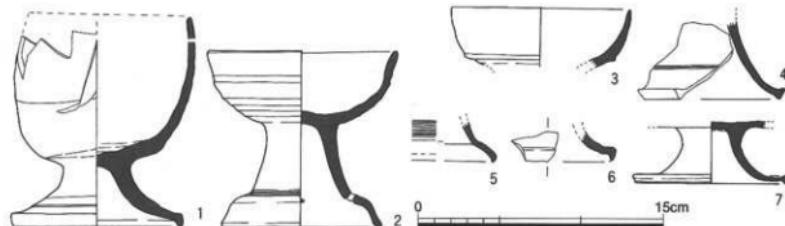
第10表 前方後円墳出土須恵器(壺)観察表

回	番号	種別	法蓋(cm)(復元径)	技術的特徴	胎土/色調	備考
30	1	須恵器 壺身	口縁部直径 器高 (5.5)	外面 横ナデ 内面 横ナデ	白色粒子、黒っぽい粒子目立つ 明青灰(Hue5B7/1)	外面:自然釉
	2	須恵器 壺身	口縁部直径 残存高 3.8～ 4.2	上面:横ナデ 底部:ナデ後ヘラ削り仕上げ	白色粒子多い 灰(HueN4/1) 内面:外側は小豆色に近く内部中央は黒色帯となる	全体的にいびつ
	3	須恵器 壺身	口縁部直径 残存高 2.3	外面 横ナデ	白・黑色粒子	外面:自然釉
	4	須恵器 壺身	口縁部直径 (14.8) 残存高 2.5	外面 横ナデ 内面 横ナデ	白色粒子、石英、砂っぽい 灰黄(Hue2.5Y6/2)	焼成不良
	5	須恵器 壺身	残存高 3.2	外面 ナデ、ヘラ削り	白・黒色粒子	
	6	須恵器 壺身	残存高 2.4	内面 ナデ	灰白(Hue10Y7/1)	
	7	須恵器 壺身	残存高 1.2	外面 回転ヘラ削り	石英、白色粒子 灰黄(Hue2.5Y7/2)	焼成良好
	8	須恵器 壺身	残存高 1.6	内面 回転ヘラ削り	黃灰(Hue2.5Y6/1)	
	9	須恵器 壺身	残存高 2.7	外面 ナデ 底部:ヘラ切り難し 内面 ナデ	白・黒色粒子 外面:褐灰(Hue5Y4/1) 内面:灰(HueN5/)	
	10	須恵器 壺蓋	口縁部直径 残存高 15.2 4.7	外面 横ナデ 底部:ヘラ削り 内面 横ナデ	白・黒色粒子灰(HueN5/2)～浅黄(Hue5Y7/3)	焼成不良 内部:未還元
	11	須恵器 壺蓋	口縁部直径 残存高 10.6 3.5	外面 ナデ 底部:ヘラ削り 内面 横ナデ	白・黒色粒子目立つ 内部:小豆色 灰白(HueN7/)	内部:未還元 キメ細かい
	12	須恵器 壺蓋	口縁部直径 残存高 15.0 2.4	外面 ナデ 底部:ヘラ削り 内面 横ナデ	白色粒子多い 灰褐(Hue10YR6/2)	焼けひずみ有 キメ細かい
	13	須恵器 壺蓋	残存高 1.5	外面 ナデ	白・黒色粒子目立つ 黄灰(Hue2.5Y6/1)	
	14	須恵器 壺蓋	口縁部直径 残存高 14.0 2.6	外面 ナデ 内面 ナデ	白色粒子多い キメ細かい 褐灰(Hue10YR4/1)	
	15	須恵器 壺蓋 半偏つまみ	残存高 1.8	上面:ヘラ削り後ナデ仕上げ 下半:ヘラ削り仕上げ	白色粒子 灰(HueN4/1)	焼成不良
	16	須恵器 壺蓋	口縁部直径 残存高 11.0 2.5	外面 横ナデ 内面 横ナデ	白・黒色粒子目立つ 黄灰(Hue2.5Y6/1)	
	17	須恵器 高台壺(小型)	口縁部直径 残存高 10.4 4.0	外面 横ナデ 内面 横ナデ	白色粒子目立つ キメ細かい 灰(HueN6/)	



第30図 前方後円墳出土須恵器(前環・1/3)

面に沈線を施した後に穿孔しており、均等な位置に4つ確認できる。坏体部外面は丁寧にヘラ削りが行われており、比較的薄い仕上がりとなる。5は2と脚部裾が形態的に近く、外面に施されたカキ目も共通することから、形式的に近い関係にあるものと思われる。6は脚部裾の形態が1や4・7に近い。4は外面に横位の沈線を施し、端部断面が上下に突出する形態となる。脚部は7よりも長く、2などのような長脚に復元できる。7は短い脚部に平底の坏部がつく形態であり、出土品中もっとも新しい部類に含まれよう。焼成良好で、きめ細かい胎土に、非常に薄い仕上がりの器壁が特徴的である。外側のみが還元し、内部まで完全に還元していない製品は1と4・5である。



第31図 前方後円墳出土須恵器(高環・1/3)

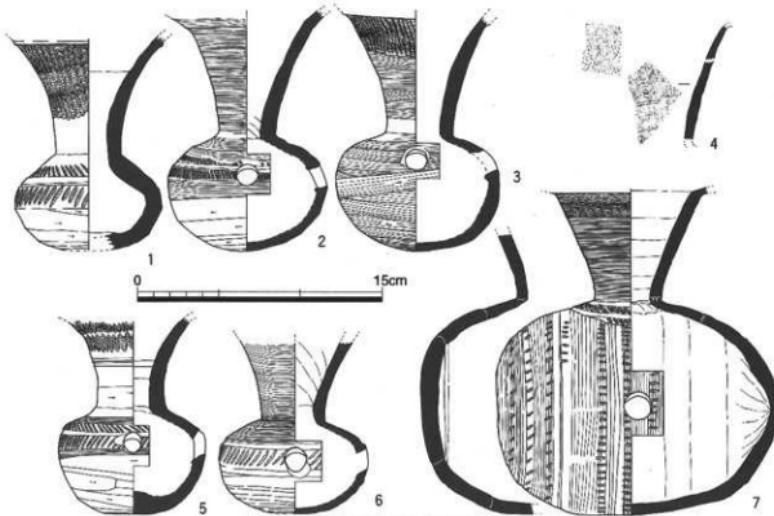
第11表 前方後円墳出土須恵器(高環)観察表

図	番号	種別	法量(cm)(復元径)	技術的特徴	胎土・色調	備考
31	1	須恵器 高坏 (坏部が深い)	口縁部直徑 7.5~8 11.8~ 12.8	外面 回転利用のナデ 内面 回転利用のナデ	黒色粒子目立つ 灰黄(Hue2.5Y7/2) 焼け歪み大きい	口縁部:椭円 焼成甘い 内部まで還元していない
	2	須恵器 高坏	口縁部直徑 7.5~8 11.8~ 12.8	外面 芦部:唇の上に回転利用のナデ 脚部:回転利用のナデ 内面 回転利用のナデ	黒色粒子目立つ 明青灰(Hue5B7/1)	焼成良好 外面:凸線が一条 うすく自然輪
	3	須恵器 高坏	口縁部直徑 約8.0	外面 横ナデ 内面 横ナデ	白色粒子目立つ 灰(HueN5/-4/)	
	4	須恵器 高坏(脚部)	脚部径 約10.0	外面 横ナデ 内面 横ナデ	白・黑色粒子目立つ にぶい褐(Hue7.5YR6/3)	焼成不良 キメ細かい
	5	須恵器 高坏(脚部)	残存高 2.4	外面 横ナデ 内面 横ナデ	白色粒子、砂っぽい 灰黄褐(Hue10YR6/2)	未還元
	6	須恵器 高坏(脚部)	残存高 1.8	外面 横ナデ 内面 横ナデ	白色粒子、砂っぽい 灰黄(Hue2.5YR7/2)	焼成甘い
	7	須恵器 高坏(脚部)	脚部径 9.5	外面 横ナデ 内面 横ナデ	白色粒子目立つ にぶい赤褐(Hue5YR5/3-5/4)	焼成良好

第32図は鰐の実測図である。鰐は形態的に頑丈であるのか、口縁部を欠く以外はほぼ完全な形で出土している。7の俵型鰐の場合、口縁部以外は2~3cm大の破片となって出土しているが、ほぼ完全な形にまで復元できた。鰐に共通する点は口縁部が失われている点である。全周するように失われていることから、意図的に打ち欠かれたものが古墳へ持ち込まれたと考えておきたい。1と4は破片資料で、復元実測である。いずれも底部は丸底で安定せず、水平な面に置く場合には適さない。1は体部に透かし孔がない部分の破片であり、出土した鰐の中でもっとも体部の小さいものである。体部上半に二段の連続斜位の刺突文、それより下半は回転利用のヘラ削りである。刺突文の間には凹線が一条施されている。口縁部は上半が櫛描き波状文三段である。2は体部に張りのある形態で、外面は体部上半から口縁部までカキ目がみられ、体部下半はヘラ削りである。透かし孔の上半部分にかかる位置に刺突文の上から凹線が一条施される。3は全体的に外面にカキ目が施され、口縁部上半に櫛描き波状文二段がカキ目の後に施されている。4は口縁部の破片資料である。拓影にあるように口縁部上半に櫛描き波状文が施され、それ以下は横ナデ仕上げである。形態的にも2や3など似ているが、器壁が薄い点が異なる。5は体部の肩が張る形態で、口縁部も短めとなる。底部は平底となり平らな面の上では安定している。口縁部中位に凹線を二条施し、それ以下は横ナデ、以上は櫛描き波状文となる。体部には透かし孔にかかる部分に二段の刺突文と凹線が施されている。5の櫛描き波状文は離れて二段施されており、1や3・4のように重ねるような施文方法ではない。6は丸みのある体部をなし、体部中位外面に二条の凹線を施し、そのおよそ1.3cmの隙間に刷毛状工具による斜位の刺突文を施している。体部下半は回転利用のヘラ削り、上半から口縁部にかけてカキ目がみられる。7は俵型鰐で、

第12表 前方後円墳出土須恵器(鰐・提瓶・壺)観察表

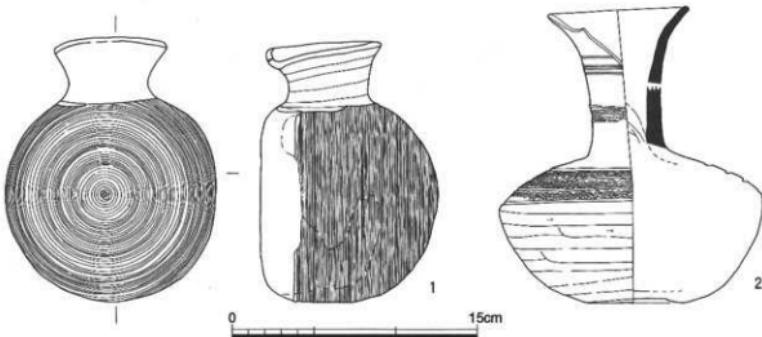
図	番号	種別	法量(cm)(復元径)	技術的特徴	胎土/色調	備考
1	須恵器 鰐	頭部径	9.5	頭部:櫛描き波状文	白色・黒色粒子、気泡が多い	
		胴部径	9.1	外面 脇部上半:刺突文	白灰(HueN7/)~灰(HueN4/)	
		胴部高	6	下半:回転利用のヘラ削り	内面:頭部上半自然釉	
		残存高	13.5	内面 回転利用の横ナデ		
2	須恵器 鰐	頭部径	3.5	頭部:カキ目	白色粒子	
		胴部径	9.9	外面 脇部上半:刺突文、カキ目	明青灰(Hue5B7/1)	
		胴部高	7.2	下半:回転利用のヘラ削り	暗青灰(Hue5B4/1)	
		残存高	15	内面 横ナデ	外周:うすく自然釉	
3	須恵器 鰐	頭部径	4.2	頭部上半:櫛描き波状文	やや砂っぽい	
		胴部径	10.2	外面 下半:カキ目	灰白(Hue5Y7/2,7/1)	
		胴部高	7	頭部:カキ目	内部:頭部と底部中央に自然釉	
		残存高	15	内面 横ナデ		
4	須恵器 鰐	残存高	7	外面 櫛描き波状文	白色粒子多い	
				内面 横ナデ	灰(HueN5/~/4/)	内面:自然釉
5	須恵器 鰐	頭部径	4.2	頭部:櫛描き波状文	白色粒子	
		胴部径	9.1	外面 脇部上半:刺突文	灰(HueN6/)	
		胴部高	6.4	下半:回転利用のヘラ削り	明青灰(Hue5B7/1)	
		残存高	12.3	内面 横ナデ	外周:斜上から自然釉	
6	須恵器 鰐	頭部径	3.9	頭部:カキ目(細かい)	白色粒子	
		胴部径	9.3	外面 脇部上半:刺突文	灰(HueN4/)	
		胴部高	5.8	下半:回転利用のヘラ削り	外面:自然釉	
		残存高	10.8	内面 横ナデ		
7	須恵器 鰐 (俵形)	頭部径	9.2	頭部上半:櫛描き波状文	白色粒子、黒色粒子目立つ	
		胴部幅	17.3	外面 下半:カキ目	やや砂っぽい・焼きあがり	
		胴部高	13.3	剥離:刺突文とカキ目による剥離	灰白色(Hue5Y7/1)	
		残存高	20.4	内面 ナデ		
33	須恵器 提瓶	口縁部直徑	6.8	カキ目	やや砂っぽい	
		頭部直徑	9.1	外面 全体的に自然釉がかかり、口縁部から底面にかけて剥げている。	白色粒子が目立つ 灰白(Hue10Y7/1)	完形品
	須恵器 壺	胴部高	11		やや黄色っぽい	
		器高	16.2	内面 ナデ		
	須恵器 壺	口縁部直徑	8.7	頭部:カキ目、櫛描き波状文	砂っぽい生地	
		頭部直徑	5	外面 脇部上半:櫛描き波状文	白・黑色粒子	
		胴部径	16.3	下半:回転利用のヘラ削り	灰黄(Hue2.5Y7/2)~	
		器高	18.4	内面 横ナデ	灰白(Hue5Y7/2)	



第32図 前方後円壙出土須恵器(前方後円壙・3/3)

1～6 同様口縁部が打ち欠かれている。実測図には左右の断面を付け加えているので、体部の形成が理解できるかと思われる。実測図右を下に体部を作り、実測図左にるように粘土円盤で蓋をしていことがあることが想定できるであろう。その後、外面の施文を行い、横に置き口縁部を取り付ける穴をつくり、透かしを開けている。口縁部は別に作っておいたものをはめ込むような作業経緯であろう。口縁部の接合は比較的丁寧で内面の接合痕は丁寧になで消されている。口縁部外側はカキ目、内面は横位のナデ仕上げである。

第33図は提瓶と壺の実測図である。いずれもほぼ完全な形で出土しており、趣と同様に器壁が厚いためか、破損しにくい形態なのであろう。1は小型の提瓶で肩部に付く鉤が失われている形態である。体部は全面カキ目が施されており、上半分に釉がかかっている。口縁部は実測図のように歪んでおり、口縁



第33図 前方後円壙出土須恵器(提瓶・壺・1/3)

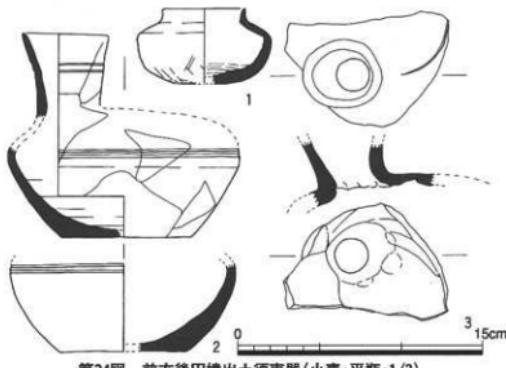
部外面は横ナデ仕上げとなる。2は長頸壺で、口縁部を一部欠いているが、それ以外は完全な形で残る。胴部は肩の張る形態で算盤玉に近い。底部は平底で、中心部分は上げ底状となり、底部周縁が接地面となる。口縁部は直立し、端部で外反する形態である。口縁部外面は四条の凹線と一条の櫛描き波状文が施され、体部外面には上半に三条の櫛描き波状文と区画線として凹線が四条施されている。体部外面下半は回転利用のヘラ削りとなる。

第34図は壺類の実測図である。1は小型の壺で、半分ほどの資料の反転実測である。平底の短頸壺で、対応する蓋が存在したものと思われる。焼成が良好で、精緻なつくりである。2は破片接合により平瓶に復元できた。焼成があまりよくないもので、完全に還元した製品ではない。胴部に二条の凹線があり、口縁部にも二条の凹線がみられる。平底の形態で接地面は比較的広い。3も平瓶の頸部部で破片実測である。3は2よりもやや大型の平瓶に復元でき、やや丸みのある形態と思われる。2よりも焼成が良好であるが、胎土はやや砂っぽい。内面には粘土板の接合痕とそれに伴う強い指先のナデ調整痕がよく観察できる。胴部上面には沈線が一条あり弧を描いている。

第35~42図は壺の実測図である。壺は全般的な形態がわかるまでに復元できたものもあり、良好な資料といえる。ほぼ完全な形にまで接合できたものは壺①と壺⑤で、壺②は半分ほどまで接合し、それ以外は1/3ほどまでの接合である。壺②は形態的に壺としたほうがいいのであろう。

第35図の壺①はほぼ完全な形にまで復元できた。内外面ともに拓影の一部を掲載している。口縁部が短めで、肩が張り、胴部中位も張る形態である。底部は丸底と思われ、中心付近は接合する破片が出土していない。外面には平行(擬格子)叩き痕の上に横方向の刷毛調整がみられる。刷毛調整は胴部上半に丁寧に施され、下半は疎らである。内面は同心円文當て具痕が密に重なっており、底部近くとそれ以上では方向性に違いが見られる。それに対応するかのように器壁断面に厚みの残る部分が見られる。段階的な叩き締め作業が行われたのであろう。口縁部は外面が丸く作られ、内面は平らとなる。口縁部と胴部との接合部分は器壁が薄くなっている。

第36図の壺②は半分ほどまで接合により復元できた資料である。器壁が厚いためか、破片の大きさが壺①よりも大きい。外反する口縁部は端部に小さいかえりをつけしており、特徴的である。口縁部外面には凸線を2条つくり、その間に斜位の凹線(断面V字)を連続して施している。口縁部内面は横ナデ調整であり、粘土紐の凹凸が残る。胴部は中位よりやや上に最

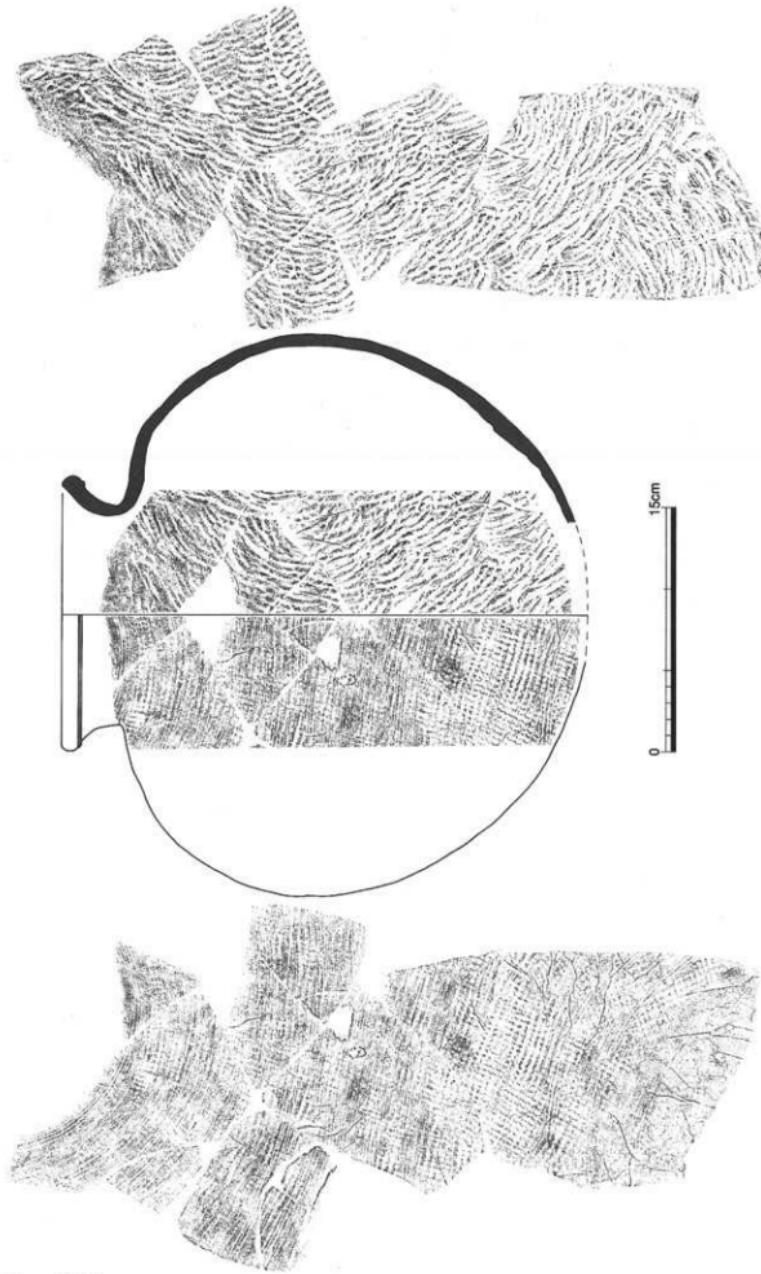


第34図 前方後円墳出土須恵器(小壺・平瓶・1/3)

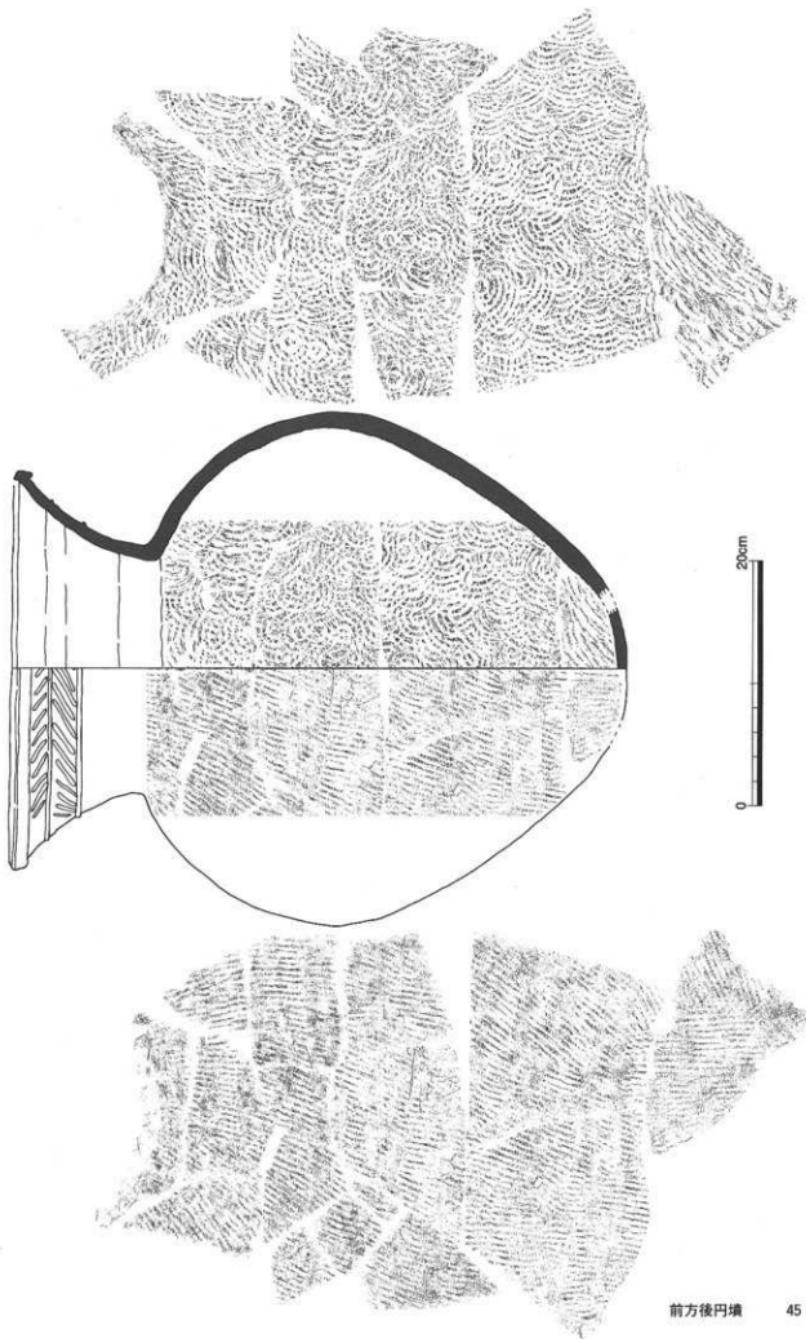
第13表 前方後円墳出土須恵器(小壺・平瓶)観察表

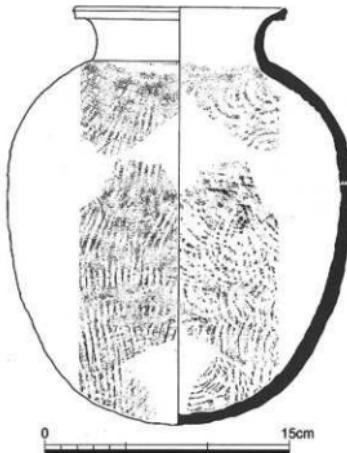
図	番号	種別	法量(cm)(復元径)	技術的特徴	胎土/色調	備考
34	1	須恵器 小壺 (短頸壺)	口縁部直径 5.0	外面 横ナデ、底部・ヘラ切り差しと 手持ちのくず裏り鉛錆くナデ	白色粒子少々 灰白(HueN7/)~ 灰(HueN4/)	
	2	須恵器 平瓶	口縁部直径 5.2 頸部直径 3.8 壺高(復元径) 12.5	内面 回転利用のナデ  外面 胴部 下半;削り仕上げ  内面 横ナデ	白色粒子、石英 黄褐色(Hue2.5Y4/4~4/6)	焼成不良 全体未還元
	3	須恵器 平瓶	残存高 4.0	外側 回転利用のナデ  内面 指頭圧痕	白・黒色粒子目立つ 灰白(Hue7.5Y7/1)	

第35図 前方後円墳出土須恵器(図①・1/3)



第36図 前方後円墳出土須恵器(縹②・1/4)





第37図 前方後円墳出土須恵器(型④-1/3)

は疎となる。内面には同心円文當て具痕がみられ、上半は密で、下半は同心円文の中心が見えるほど疎となる。底部近くは再び密となり、この付近で器壁に厚みが残っている。①②同様に叩き締めにはいくつかの作業工程が存在する様子で、それらは特に内面の同心円當て具痕に反映していると思われる。

第14表 前方後円墳出土須恵器(型)観察表

回	番号	種別	法量(cm)	(復元径)	技術的特徴	胎土/色調	備考
35	1	須恵器 壺	口縁部直径	16.8	外面 かき目	白・黒色粒子	ザラッとしていて 砂っぽい
			残存高	31.3	内面 同心円文當て具痕後ナデ消し	灰白(Hue10Y7/1)	
36	2	須恵器 壺	口縁部直径	32.8	外面 口縁部:横ナデ	白色粒子	
			胴部:最大径	42.4	胴部:平行叩き痕後ナデ	黒色粒子	
38	3	須恵器 壺	口縁部直径	24.2	内面 口縁部:横ナデ	外面:灰(HueN6/)	やや良好
			胴部:最大径	(43.8)	胴部:平行叩き痕後ナデ	内面:灰(Hue7.5Y6/)	
37	4	須恵器 壺(小形)	口縁部直径	(13.0)	外面 口縁部:横ナデ	ややキメ細かい 白・黒色粒子	
			胴部:最大径	21.2	胴部:平行叩き痕後カキ目	灰白(Hue5Y7/1)～ 灰(Hue5Y6/1～5/1)	
39	5	須恵器 壺(博形)	口縁部直径	13.5	内面 口縁部:横ナデ	白・黒色粒子	やや良好
			胴部:最大径	35.5	胴部:同心円文當て具痕	外面:にぶい黄橙 (Hue10YR7/2～7/3)	
40	6	須恵器 壺	口縁部直径	30.5	内面 口縁部:横ナデ	内面:灰黄褐(Hue10YR6/2)	
			胴部:最大径	34.0	胴部:平行叩き痕	やや砂っぽい、白色粒子多い 灰白(Hue5Y7/2)～ 灰(Hue5Y6/1)	
41	7	須恵器 壺	残存高	26.7	内面 同心円文當て具痕	白・黒色粒子、石英	自然釉: にぶい黄(Hue2.5Y6/4) ～淡黄(Hue2.5Y8/3)
					一部横ナデ、ナデ	外面:灰白(Hue7.5Y7/1)～ 灰(Hue7.5Y6/1)～ 灰(Hue7.5Y5/1)	
42	8	須恵器 壺(小形)	胴部:最大径	48.2	外面 平行叩き痕	砂っぽい、白色粒子	
			残存高	43.1	内面 同心円文當て具痕	外面:灰白(Hue7.5Y7/1) 内面:灰(Hue7.5Y8/1)	
						下半:同心円文當て具痕	